

氏名	李 小 清
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	学 術
学位授与番号	博甲第1611号
学位授与の日付	平成9年3月25日
学位授与の要件	自然科学研究科生産開発科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	林地適地・草地非適地における草地畜産の展開過程に関する研究
論文審査委員	ー日本の北上山系における日本短角種牛肉用牛を中心にー 教授 岩間 泉 教授 目瀬 守男 教授 佐藤 豊信 教授 佐藤 勝紀 教授 大崎 紘一

### 学位論文内容の要旨

本論文は、モンゴルなど発展途上国の固有の条件に基づく、独自の土地利用の発展のための規範として、アジアの先進国、日本における草地畜産の展開過程を整理している。

1章においては、時間空間論的接近により、「自然の土地」の分化の在り方を、一義的適地性と二義的適地性より接近、日本が林地適地・草地非適地となることを、ユーラシア大陸にかかわって論証している。

2章においては、日本の位置条件と地形・地質条件を整理し、林地適地・草地非適地の中に、準草地適地性が生じ、これを基盤に、入会草地が自然村単位に維持され、日本固有の草と牛の結合システムが歴史的に形成されることを論証している。

3章においては、戦後の社会条件の改革と対応して、入会草地の圧縮が生じる中で、準草地適地性を基盤に、入会草地を公共投資を利して、再編し、新しい草と牛の結合の在り方を再構築しえた産地の展開過程を解明している。

終章では、要約的総括を示している。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、時間空間論的接近により、「自然の土地」の適地性、準適地性を整序し、林地適地・草地非適地である日本における準草地適地の人為的草地を基盤に、草と牛の適正な結合の在り方を伝統的に創り上げ、さらに、戦後における社会的条件、生産力の変容に対応して、伝統的システムの再編により、新しい草と牛の再結合結合を創り上げてきている北上山系山形村の日本型草地畜産の展開過程を解明している。

主要な解明点は以下のである。

1. 土地利用は「自然の土地」に規定される。「自然の土地」は、一義的には位置条件により、一義的適地性が生じるが、二義的には、地形、地質条件により、一義的適地性が偏倚し、二義的適地性が生じることがある。
2. モンスーン・アジアに属し、林地適地である日本の土地利用は、その一義的適地性により、林地と水田を基盤とする無家畜灌漑農法が骨格となる。水田は草肥を必要としたため、草肥源として的人為的草地が、地形、地質条件を利して作られ、この草地は、全国的に、平坦地・山間傾斜地において、自然村単位の火入れ、刈払いにより維持、管理、利用された。大家畜は苜蓿材料の運搬に必要とされた。これらの集団的経営行動に対応して、入会権が成立している。
3. 山形村の原自然条件を、全国、東北地域、岩手県のそれと対比的に見ると、地域的气象条件、地形、地質条件において、厳しい自然条件があり、これに適応する家畜として、南部牛が伝統的に選択され、この南部牛を日本短角種牛に改良し、火入、刈払い、放牧（木の子とり）を主体に、入会草地と日本短角種牛との適正な結合関係を構築してきている。
4. 高度経済成長期に、山形村では、肉用牛として、日本短角種牛の増頭目的のために、公共投資に基づく、草地改良が行われたことを整序した。そして、新しい草と牛の再結合システムを創り上げ、繁殖肥育の地域一貫経営が形成されてきている。
5. 現在、高度経済成長より安定経済成長への構造的転換、ガット・ウルグアイラウンド合意に基づく畜産物の自由化に対応して、日本短角種肉用牛の価格低下が著しい。このために、山形村においても、飼養頭数の減少、人工草地の荒廃化が生じてきており、両者の適正なバランスの実現が求められている。このために、自然草地の利用・維持管理の経験・慣行技術蓄積が消失しない時期に、山形村の中核機構による伝統農法の現代的再評価という意思決定が求められていることを示した。

以上、本論文は新しい方法論により、適地性、準適地性に対応する土地利用の展開メカニズムを実証的に明らかにしており、博士（学術）論文として、適当であると判断する。